〈論　　文〉

ビジャ・エルサルバドル精神衛生共同体センター

―周辺社会における貧困と精神衛生―

原田　　金一郎

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　インタビュー
　1　カルメン所長
　2　ホルヘ
　3　ミリアム
　4　ビセンテ
　5　フェルナンド
　6　パトリシア
　7　ファニ
　8　ミリアン
　9　ランディ
　10　エウメリア
　11　その他のスタッフ
Ⅲ　むすびにかえて
文献目録

Ⅰ　はじめに

ペルーの首都リマから南へ20キロの所にビジャ・エルサルバドル市がある。この街の特殊な歴史・性格についてはすでに触れた[1)]。今回とりあげるのは同市にある特異な精神衛生共同体センター（Centro Comunitario de Salud Mental, CECOSAM［セコサム］）である。

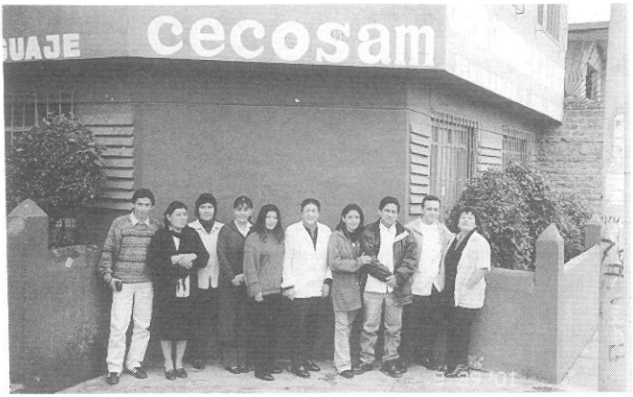
ビジャ・エルサルバドル市の中心部のセサル・バジェホ大通りから南へ２ブロック入った所に、CECOSAM の青い３階建ての建物がある。何の変哲もない建物であるが、これがペルーで先駆的な精神衛生センターなのである。その待合室には常に父母や子どもたちがつめかけている。まずその特徴は、精神科医がいないということにある。ここにいるのは臨床心理士で、心理学的治療を行う。さらに言語治療士や数学教師や小児科医などがいて、患者の大半を占める子どもたちの精神衛生の治療を行っている。センターの実績としては、1987年の創立から99年にかけて39,641人の患者を取り扱っている[2)]。

CECOSAM の建物

1）［原田2000および2001］参照。

2）［Pimentel 2000:64］そのうちわけは、11歳以下の子ども23,342人、12～18歳7,982人、19歳以上8,317人である。

ビジャ・エルサルバドル精神衛生共同体センター



CECOSAM のスタッフ

センターの目的について、カルメン・ピメンテル所長は以下のようにのべている[3)]。

① 社会のもっとも貧しい層、とりわけ子ども、青少年、女性に対し、無料の総合的な心理学治療を施すこと（というのは、さもなければ、市場の帝国のあらゆるタイプのサービスにたいする経済政策によって、かれらはこの種のサービスに接近できないからである）。

② 子どもや青少年を個人的な心理学的処置によって、家族に統合すること。

③ 虐待されている女性に対し、その人間関係の解放のために特別の配慮を払うこと。

④ 幼児虐待と、女性に対する男性の虐待の防止のために特別の行動をとること。

⑤ 子ども、女性、家族の権利を守るために行動をとること。

⑥ 父母に対し、その子どもの権利にたいする責任と義務に関して総合的で学際的な情報を与えること。

⑦ 人格の開発のための基盤として自敬の念を強化するために、父母に変革の行為を推進させること。

なぜ「無料」なのだろうか？　それは患者たちの家庭が貧しいからである。ビジャ・エルサルバドルの周縁地帯に、サトウキビの茎で編んだ壁とスレート

3)Ibid.44-45.

板の屋根からなる掘立て小屋が並んでいる。バリアダ（barriada）と呼ばれるスラムである。そこには水も電気もない。たまにまわってくる給水車にドラム缶で水を受けて（1杯45円）それで一家が1日暮らしている。こんな所から通ってくる子どもにお金があるはずがない。実際にバス代がなくて歩いて来る親子もいるという。

このような極貧地域にセンターは居を構えた。そして14年間貧困と闘い続けている。筆者は、2001年8月の1ヵ月間、センターで聞き取り調査を行なう機会をえた。本稿はそのささやかな成果である。

Ⅱ　インタビュー

1　カルメン所長（Carmen Pimentel、臨床心理士）

カルメン所長

［質問――現在の CECOSAM の財政危機はいかなるものか？］

――資金に手をつけている。2002年にはそれがゼロになる。現在5ソル〔150円〕集めているが、払えない人が来なくなる。逆に、援助を必要としない人が来る。そこで、もう一度無料にしようと思っている。現在のペルーの危機の反映で人々は苦境に陥っている。が、閉鎖はできない。政治状況も悪く、まだ光はない。人々は待っている。私はトレド新大統領を買ってない。フジモリ大統領は悪か

った。

――オランダ大使館から３年にわたって年間2,400万円受け取っていた。それで専門家の賃金と総費用を払っていた。ドイツのカリタスからも400万円受け取っていた。〔このオランダからの資金が今回打ち切られた。〕

――人々に私たちは教えている。多くの人が助けを求めてやってくる。家庭内暴力、虐待、性的問題など、人々の問題は多い。

［質問――５ソル集めなければどうするのか？］

――所長は現在無給だ。心理士たちには月２万円払う。普及員は半日勤務で8,000円にしている。事務所の秘書はもういない。

――電話代、電気代、ガソリン代、普及員やキャンペーンの交通費がない。しかし、オランダからお金をもらわない方がよかった。フジモリ時代にはすべての寄付が大統領府に集められた。そしてフジモリはいった。「もっとよい保健機関がある」と。

――民衆は５ソル〔150円〕払えない。金をもってない。しかし、最低４人の専門家が必要だ。コレヒヨ〔10年制の小中高校〕も子どもを拒絶する。というのは、貧者、先住民、文盲の者に対して差別があるからだ。現在ペルーはいい状況にはない。フジモリ以後治安が悪い。

――多くの患者は短期の症状で、早く手当すれば早く治る。精神科医は金がかかるので置かない。それで精神病患者は、交通費を払い精神病院に送る。

［質問――今までに３万９千人の患者を受け付けたとあるがこれはどうか？］

――初期はビジャ・エルサルバドルの人たちが多かった。現在では、パチャカマック、ルリン、サンファン・デ・ミラフロレス、リマなど他の多くの所から集まる。多数は、子ども、女性、青少年である。子どもは虐待、青少年は精神的虐待が多い。最近は、男性に対する虐待が増えている。〔不況で〕女性が稼ぎ始めると、男性を支配しようとする。男性はそれをかくしたがる。

［質問――困難なケースをあげて下さい］

――それは近親相姦（incesto）です。父と娘、兄と妹の間のもので、愛の欠如、感情の混乱を意味します。悲しくつらいものですが、距離を置かねばなりません。一番困難なケースです。私たちは訴えたりしません。本人が自分で分

かるべきことです。官憲は容赦なく逮捕しますが。

［質問――自主管理都市共同体（CUAVES）との関係は？］

―― CUAVES の方が初期のコマスでの活動〔CECOSAM の前身〕を知っていた。リーダーのロハス（Apolinario Rojas Obispo）が私を招待した。ロハスが Centro Comunitario〔共同体センター〕のアイデアをだした。ところが彼は、89年だったと思うが腹膜炎で死亡した。

――当初、部屋を借りて CECOSAM の治療室に改造した。ドイツが金を出し、自分で材料を運んで作った（のちに市役所が、ホセ・マリア・アルゲダス・ホールを貸さなかったので、ホールを作った）。ベラスコ時代で〔ベラウンデ時代か？〕ドルの入手は困難だった。ドルを闇市場で交換した。しかし、ロハス以後、誰も関心を払わなくなった。

［質問――現在のビジャ・エルサルバドルをどう思うか？］

――よくなった。水はまだ欠如しているが電気も公園もある。しかし連帯は後退し、エゴイズムが表われはじめている。

［質問―― CECOSAM の機能について？］

――リマ中心部からも、スルコ、バランコからも人が来る。父親教育を誰がするのか、大学か？　親子はいかにあるべきか、ここでは教える。完全な親子関係のあり方を教える。子に対する父親、夫に対する女性、親に対する青少年など、「誰もそれを教えてくれなかった！」。こうして現実と向きあうことによって解放される。

［質問――心理士はどうやって３歳の子どもを治療するのか？］

――食べない、寝ない、おねしょする、といった話を聞いて、親に説明する。情報によって父親の教育をする。公園に連れていくか？　―それは母親が、という。散歩をさせ、お風呂に入れ、眠るまでお話を聞かせる。４時頃起きて、おしっこをさせる。おねしょをしても怒らない。涙といっしょで、子どもにとっては快感なのだから――したがって、父親といっしょでないと治療しない。

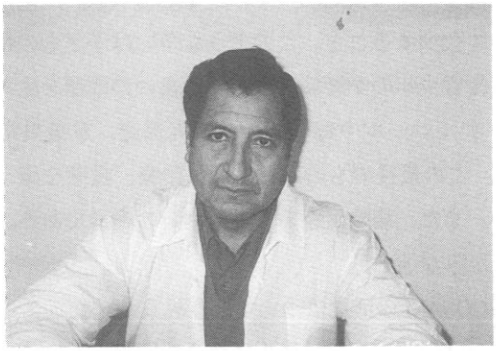
――成人の場合も同じく説明する。帰りが遅いとどなる妻に対して説明する。女性が稼ぎだすと暴力をふるうようになることがある。

――カール・ロジェールズの「心理分析治療」を利用しているが、心理分析

以外の方法も必要だ。彼は人道主義的で現実主義者だ。

――とにかく、経済的、文化的、政治的危機のさなかにあるビジャ・エルサルバドルの人々を救いたいと考えている。

2　ホルヘ（Jorge Soto、46 歳、臨床心理士）



ホルヘ

［質問――ここで何年働いているか？］

――4年働いている。私は、サンマルティン・デ・ポレス大学心理学部を卒業した。

［質問――現在どんな仕事についているか？］

――精神衛生の広報を担当している。直接的に診察もするが、患者は青少年と成人が主である。また、セミナーを3つの形式で行う。都市の極貧層を対象にしている。教育機関や基礎組織と活動の開発も行う。また、以下の点の教育にも従事している。すなわち、暴力の予防、性教育、価値教育、人的開発、人間関係がそれである。

［質問――どんな問題に直面しているか？］

――子どもの問題を解決するための両親との絆が弱いこと。患者の多くが子どもを援助することを必要としている。しかし夫婦の場合、片方が協力しないことがある。また親が、治療のための時間の都合がつかないことがある。基本的問題として、精神衛生に偏見をもっている。セミナーにおいても距離を置い

ている。精神異常を扱っていると思っている。これらが障害となっている。その結果、早目の治療が不可能となる。

――機関全体のレベルでは適切な給料〔を払えない〕という問題がある。このような経済援助の問題をかかえつつも、CECOSAM は発展してきた。

［質問――困難なケースにどんなものがあるか？］

――経済的状況をめぐる夫婦間の争い。子どもの教育形式に関する同意が一方の支配によって欠如すること。このような争いは子どもの情緒的健康をおびやかす。子どもや青少年の学習障害は、ふるまいの問題を生みだす。自殺の意図による脅迫、アルコール中毒・依存、現実逃避、意識異常による精神異常(psicopatrogico)。この最後のものは、医師、治療、投薬を嫌うのでたいへん治療がむずかしい。また、病院が遠いことも困難の一つである。リマには三つの精神病院があるがみな遠い。

［質問―― CECOSAM の活動についてどう思うか？］

――こんな施設は少ない。精神衛生に統合的関係をもっているのはおそらく〔ペルーで〕唯一であろう。青少年、麻薬などの予防に関してはあるが、精神衛生に関しては少ない。国家施設に比べても先駆者的である。私は、厚生省の精神衛生施設も知っているが、これほどすぐれてはいない。重要性は、精神衛生に関する新しいアプローチであることにある。精神衛生には社会的環境が一番重要である。本センターが、もっとも貧しい者、もっとも必要とする者を対象としていることも重要なことである。金持ちは心理士にも治療士にもアクセスをもっている。しかし極貧層はそうではない。そこで本センターが支えている。本センターは、ビジャ・エルサルバドルだけをカバーしているのではない。リマ首都圏全体から患者が来ている。

［質問――ビジャ・エルサルバドルについてどう思うか？］

――集団としては、基礎が一つの市として組織されている。リーダーは低開発克服のための動力となっている。市として開発にむけて適切な方法で行っている。区分された集団、たとえば工業団地や農牧ゾーンが市として一つに統合されている。

3　ミリアム（Myriam Vergaray、臨床心理士）

ミリアム

［質問――センターで働いてどれくらいになるか？］

―― CECOSAM で働いて２年になります。私はビジャレアル大学を出て、国立サンマルコス大学で修士を終えました。

――簡略診察を行っているが、折檻や家庭内暴力が多い。両親の情報不足、文化程度の低いことがその原因です。医師になる道、エコノミストになる道など、可能性はいくらでもあるのに知らない人が多い。そして６人、８人の子どもをかかえている。

――患者の大半は子どもで、言語障害などの症状がある。親による虐待が原因です。大人の場合は情緒的問題がある。しかし、大半は子どもで、両親同伴で診察しています。

［質問――具体的なケースをあげて下さい］

――アンヘルという10歳の子どもがいた。虐待の実態を聞いた。チコテという３本足の器具を使った折檻について彼は語った。また真冬に冷水につけるということもされた。折檻は子どもに害を与えるということを私は両親にいった。そして文化活動に参加し、学習するようになった。食事をよくとり、体重も回復した。５セッションで回復した。彼は頭がよく、両親は共に働いていてお金があったので、恵まれたケースだった。父親は酒を飲まず、麻薬もやってなかった。

［質問――困難なケースについて話して下さい］

――母親が婚約者と新年に出かけた。やがて赤ちゃんが生まれたが、白人だった。問題になったが、生物学的に親子関係はありえなかった。そこで父親は否認した。祖母が行動的な人で、赤ちゃんの世話をした。４つのコレヒヨがこの子を見捨てた。教師たちにも見捨てられた。頭のいい子だった。オモチャに電池をつないで動かした。こんな子どもは見たことがなかった。肌の色がちがうので人種差別を受けた。母親は罪をその子のせいにした。私はカルメン所長の所へこのケースを送った。よく終わったわけではない。

――困難なケースでは、暴力のケースがある。母親は働いていた。夫は何もしない。子どもたちが市場へ行ったり掃除をしていた。16歳の子どもだったが、10歳の時、性的問題があり、５年間叔父の所にいた。虐待があったが、暴力については話さなかった。「母が私をここに送った」のであって、私は来たくないといった。カルメン所長は経験が豊富なのでそのもとにこのケースを送ったが、人間関係が複雑で、私にとって困難なケースでした。

［質問―― CECOSAM をどう思うか？］

――この施設はよく機能している。今まで共同心理学を学んだが、こんな組織はなかなかなかった。所長の計画は子どもの虐待防止ですが、よく機能している。

［質問――ビジャ・エルサルバドルについてどう思うか？］

――よく組織化された社会で、他の市とはちがう。人々は、バソ・デ・レチェ〔牛乳の無料配給運動〕やコメドル・ポプラル〔食糧配給運動〕などの組織によく参加している。

４　ビセンテ（Vicente Ramon、32 歳、臨床心理士）

［質問――センターでどのくらい働いているか？］

――１年７ヵ月になる。サンマルコス大学を卒業し、研究所にいたりしてここに来た。保健キャンペーンに参加したりして、本センターに呼ばれた。

――セミナーに参加した。親子、青少年、子どもたちを呼びよせた。仕事は理論によるが、実践も必要だ。ここの仕事の困難さをそこで知った。活動的な

ビセンテ

仕事と参加上の技術が必要だ。子どもの性的問題、虐待が多い。

［質問――センターの意義はどこにあるか？］

――共同体への奉仕という点が重要。とかく問題の多いこの国では大切な仕事だ。それは一つの方向づけを意味している。

［質問――子どもたちの状況はどうか？］

――肉体的精神的に問題があってやってくる。まず、子どもたちの態度を観察する。失語症、低学力、集中力欠如などは、虐待が原因だ。親、とくに父親が同伴することが大切だ。

――子どもたちの知性はすばらしい。それは、家庭内暴力や経済的状況によって妨げられている。虐待が悪の根源だ。子どもたちは知性を備えており、ペルーに貢献できるものをもっている。

――創造力に富み、美術のような活動において発揮される。色を組み合わせたり、形を扱う。「画けない」子も中にはいる。画ける子は誰に習ったかと聞くと、母親か父親だという。

――子どもは創造的だ。しかし、テレビのまねには問題がある。

――患者のなかで子どもたちは６～14歳で、成人は少ない。街に小グループがあって本センターをすすめている。コレヒヨのなかにもすすめる人がいる。

――保健キャンペーンをやると７～10歳の子どもたちがやってくる。親はテレビを見るか、洗濯をしていて対処しない。この辺の人は、アンカシュやカハ

マルカ〔北方ペルー〕から来ている。情緒上の考慮がない。子どもたちの権利が問題だ。

［質問――ビジャ・エルサルバドルをどう思うか？］

――私の出身地はリマの南のカニェテ渓谷でアシエンダ〔大農園〕地帯だから、こことは全然ちがう。ここには組織がある。先進的で新しさがある。

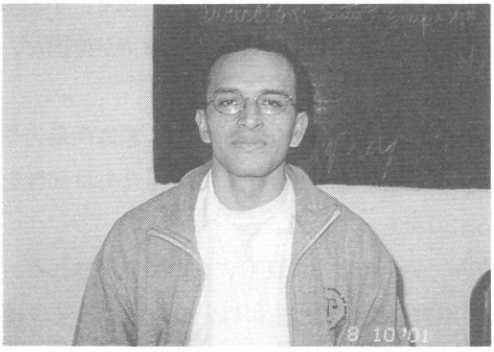
［質問――トレドをどう思うか？］

――何をするか、みてみようという所だ。彼は個人ではなくて、チームで動いている。ペルーは打撃をこうむっている。その提言はよい。しかし、欠けているのは労働の条件だ。

［質問――日本・ペルー関係をどう思うか？］

――政府ではなくて、多くの企業がペルーに来ている。しかし、フジモリ問題で日本商品のボイコット運動がおこりかけている。今後は、文化的交流の意義が大きいと思う。

5　フェルナンド（Fernando Salinas、30 歳、臨床心理士）



フェルナンド

［質問――センターでどのくらい働いているか？］

――１年半、臨床心理士として働いている。

［質問――あなたの仕事はどんなものか？］

――主として子どもを扱っている。情緒的な問題や学習上の問題などがある。

家庭に情報がなく、暴力の問題もある。青少年も扱っているが、情緒的な問題、性格的な問題、社会的な問題、性的な問題などがある。成人も扱うが、夫婦問題、親子関係、暴力の問題などがある。

――さらに、グループ治療も行っている。また、ダンスや美術のクラスを利用したり、セミナーの実施などにも従事している。

［質問――困難なケースにはどんなものがあるか？］

――家庭内暴力、診察を嫌がるケース、父親のエゴイズム、無責任が子どもに一番影響を与える。両親が診察に参加しないことも困る。子どもに能力があってもうまくいかない。ついには家族の離散につながることもある。

［質問――現在かかえている問題は何か？］

――個人的には別にない。ただ、時間の不足の問題がある。診察の予定がつまっていて、ミーティングしたり協力しあったりする時間がない。

［質問――本センターをどう思うか？］

――目的といい手段といい、このような活動をしているのはまれな組織である。しかも孤立しているのではなく、国内政策にも関係をもっている。

［質問――ビジャ・エルサルバドルについてどう思うか？］

――人口的地理的に大きな市。イニシアティブを発揮して発展しており、集団や機関への青年層の参加がある。アイデンティティを有している市である。このような青年層の方向づけがなければ、暴力その他の方向に向かうことだろう。

［質問――日本・ペルー関係についてどう思うか？］

――最近、悪い経験〔フジモリ問題〕がある。道徳的に害を与えるものだ。それをさておいて、日本文化は偉大で多彩だ。また日本は発展した国で、わが国に援助が可能な国だ。もっと密接で良好な関係を望む。

［質問――トレド新大統領についてどう思うか？］

――個人もしくはその計画を信頼できない。貧困層出身、学歴などはよいが、残余についてはまだ知られていない。セクト主義の傾向もうかがえる。

6　パトリシア（Patricia Santiani、臨床心理士）

パトリシア

［質問――本センターで何年働いているか？］

――１年３ヵ月。国立サンマルコス大学心理学部を卒業しました。

［質問――あなたの仕事は何か？］

――臨床心理士です。患者は、子ども、青少年が多い。精神衛生キャンペーンや性病予防もやっています。

［質問――典型的なケースをあげてくれますか？］

――子どもは虐待と性的問題が多い。この二つに一番気を使っている。言語障害、情緒障害も多い。その原因は、私の経験からいえば、虐待、家庭内暴力です。

――ビジャ・エルサルバドルの人は一番情報を得ている。普通はそんなに知らない。暴力事件があっても心理士に訴えない。私には、心理学を実践するのにいい所です。

――センターは今や知られており、コマス、サルミエントといった遠い所、リマ中心部からもやってきます。

［質問――どんな問題があるか？］

――克服できるものばかりでした。初期はありましたが、今はない。集会を開いてセンターを運営していくということは、他の場所ではない。エゴイズム、個人主義が多い。ここではお互いに情報を聞いたりでき、集まって相談したり

できます。

［質問――センターの活動についてどう思うか？］

――診察だけでなくキャンペーンをやる。組織が統合的、システィマチックである（心理士、普及員、教師からなる）。セミナーは総合的であり、心理士は個別的に対処し、全体として十全なものになっている。

［質問――ビジャ・エルサルバドルについてどう思うか？］

――進歩主義的地域。工業、企業、中小企業がある。同じ人物が企業をやり、地域の代表ともなる。組織された市です。

――母がビジャ・エルサルバドルのコレヒヨで働いていたのでよく知っている。昔は半砂漠だった。今は完全に変わって立派な市となった。

7　ファニ（Fany Mercedes、臨床心理士）

ファニ

［質問――センターで働いて何年になるか？］

――４年。サンマルコス大学で心理学を学んだ。

［質問――困難なケースをあげて下さい］

――重症の場合です。応急措置をとって子どもを特殊施設に送ります。その他には、子どもの数が多く目が届かないこと。父親が無視して、援助しないこと。経済的困窮などがあります。

［質問――センターについてどう思うか？］

――精神衛生はむずかしい分野で、施設が少ない。したがって、CECOSAMは一つの進歩といえるでしょう。

［質問――ビジャ・エルサルバドルについてどう思うか？］

――みんなが団結していっしょに前進している。以前は政府から独立していたが、今は残念ながら政府が介入して人々は散ってしまった。以前のようには団結していない。

［質問――日本・ペルー関係についてどう思うか？］

――きわめてよい。日本は技術先進国で米国をしのいでいる。ただし、フジモリ問題がある。日本政府は前大統領を保護している。

［質問――トレド新大統領をどう思うか？］

――計画やプロジェクトをあげているが、企業家は関心をもってない。しかし、約束したことは守って欲しいと思う。

8　ミリアン（Mirian Quintanilla、医療技術師）

ミリアン

［質問――センターで働いてどのくらいになるか？］

――１年です。私はフェデリコ・ビジャレアル大学（リマ）医療技術学部を卒業しました。

［質問――あなたの仕事は何か？］

――言語治療士で、言語障害のある人をみている。彼らは、発音その他で問

題があり、話したり伝達に不便のある人たちです。大半は子どもか青少年で、成人は少ない。成人の場合は、ドモリその他の問題がある人たちです。子どもは２～3.5歳で話せないか、伝達できない。まず表現の段階をみます。そして、両親がどういう態度をとっているかが重要です。

――子どもは表現の必要性を感じています。あらゆる形での奨励が必要です。そこで両親同伴が大切です。子どもの言語を発達させるのです。実践を教えます。また家庭での注意も肝要です。これは器管的障害のない子どものケースです。

――学校の生徒のケース。読み書きができない。話し方のおかしい子どもがいます。まず両親がよく発音できたとか観察することです。先生に相談することも必要です。症状は、発音できないとか、話すように書くとか、学習の困難として表われます。

――言語訓練は、50分子どもに対して行い、10分両親に対して行います。そして、家庭で毎日５～10分訓練します。頻度と継続が大切です。

――困難なケースでは、３歳ぐらいでドモリが多い。緊張でよけいにどもる。しかし病気ではない。情報不足のなかで両親は他の子どもと比べる。そこで情緒的障害となって表われる。つまり、親の態度が影響するのです。最初に、どんな困難が家庭であるか親と話します。緊張をほぐすことが重要なのです。いろいろ手を打って、のちに話せるようになります。家族の参加が大切。状況を説明するが、家族が協力しなければ治療はむずかしい。

［質問――治療のうえで何が問題か？］

――大半の子どもが母親と来る。父親が問題です。大半はマチスタ〔男性優位主義〕です。このセンターが精神異常者を扱っていると思いこむ。来れば正しい情報を伝えるのですが……父親が、何で子どもが助けられるかを知ることが大切です。以前病院で働いていた時、親が来なくて継続が困難でした。その点でこのセンターは他とちがっています。

［質問――センターをどう思うか？］

――他のセンターとはちがう、ここの方がよい。すべて個人が責任をもってやるシステムになっているが、ここではじめて経験しました。

［質問－ビジャ・エルサルバドルについてどう思うか？］

――金銭不足、貧困。商人が多く、子どもはひとりぼっち。子どもがどう過しているか親は知らない。家のインフラストラクチャーが悪い。

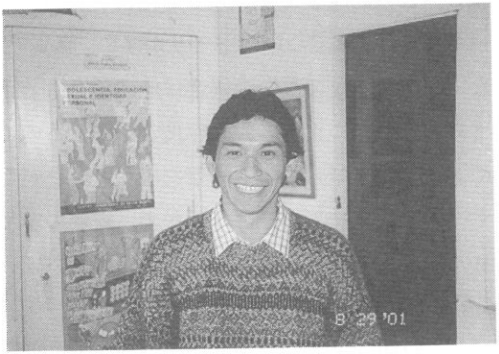
［質問――日本についてどう思うか？］

――技術的先進国、ペルーとはちがう。とくに田舎でマチスタと聞いている。よく働き、工場は止まることなく、生産力が高い。衛生についてはよく知らない。たくさんのペルー人が働いている。

［質問――フジモリ問題をどう思うか？］

――いい大統領ではなかった。たくさんの罪を犯し、圧政をしいた。麻薬取引でえた金を横流しした。その金が今問題になっている。ペルー人として大統領職にあったので、日本人ではない。

9　ランディ（Randdy Arturo、31 歳、数学教師）



ランディ

［質問――センターでどのくらい働いているか？］

――６年３ヵ月働いている。大学は国立工科大学数学部で、３年の時からここで働きはじめた。

［質問――ここでの仕事は何か？］

――数学教師で、初級・中級・高校の科学的援助と奨励を行っている。また両親が数学の重要性を理解できるよう補助している。数学のできない生徒を集

め小グループを作っている。また心理学士と協力して指導することもある。精神的・肉体的虐待のケースにおいては、科学的・指導的部分を担当する。

［質問――あなたの仕事における問題は何か？］

――学校での情報が悪く、科学的レベルが低いこと。支援が不足していること。両親に援助の準備が不足していること。

［質問――困難なケースにはどんなものがあるか？］

――数学の理解ができないこと。動機が欠如していること。学習上の問題。低い注意力と理解力。心理学士の助力を借りるが、学校の教育を理解できない子どもがいる。両親に、子どもとの取り組み方を変えるように指導している。これが一番むずかしい。両親とコレヒヨとも協力しているが、とにかく知的水準が低い。教育の形式が国立コレヒヨでは不足していることが多い。50人のクラスで教えている。70%はおそらく脱落している。動機づけ、指導がよくない。能力ない生徒はほったらかしにする。中学生ですでに数学はむずかしいと思い込んでいる。

［質問――センターの活動についてどう思うか？］

――ビジャ・エルサルバドルの人を心理学と学習の面で助けている。貧しい街で活動している。カルメン所長以下全員が献身的である。子ども、青少年、女性に対して、われわれは人道主義的・現実主義的であり、他の所ではこの点が欠けている。

［質問――ビジャ・エルサルバドルについてどう思うか？］

――多数の人が共同体としてしっかり組織されていて文化レベルを向上させつつある。冷たい他人としてではなくて、知っている人は助けようとしている。いまだ多数の人が貧しい街である。

［質問――日本についてどんな印象をもっているか？］

――技術的発展。経済力は大きい。しかし人は冷たい。組織は巨大で、実行力は大きい。知的・教育的レベルは高い。国民としては閉鎖的である。

［質問――フジモリ問題についてどう思うか？］

――日本は関与している。フジモリを利用しているのではないか。日本は悪人を擁護していると思う。

［質問――日本人に対して言いたいことは？］

――ペルーのような低開発国に教育のシステムやモデルや方法を教えて欲しい。

10　エウメリア（Eumelia Ramirez、普及員）

エウメリア

［質問――センターで何年働いているか？］

――13年、1987年の最初の年から。最古のメンバーです。

［質問――どんな仕事をしているか？］

――精神衛生普及員（promotora）です。人々を訪ね歩き、参加をつのり、状況を把握し、人々の社会経済的状況を見る。教育センターを訪ね、患者がいないか探す。また先生から情報を集める。

［質問――どんな困難があるか？］

――最初は困難だった。精神衛生が理解されていなかった。精神医学しか知られていなかった。今は大半が知っているから、そんなに困難はない。セミナーなどを通じて心理学治療が普及した。

［質問――どんな問題があるか？］

――一番むずかしいのは、最初子どもの扱いに親が応じないことだ。しかし、これはほとんど克服した。最後に経済的困難がある。現在は５ソル払わねばならないが、交通費もない人がいる。

［質問――うれしいことは何か？］

――満足するのは、ここへ訪問してくること。本センターへ来いというが、問題があってこない。やがてセンターに来て生活態度を変えることになる。訪問してもなかなか家族は支援しない。情報を与えると参加するようになり、私たちも満足する。訪問がなければ参加もない。昨年のことだが、青少年を精神科医に見せていた。いろいろ手をつくしセンターに来るようにいって、来るようになった――それが小さな個人的満足。また、結婚を打ちこわそうとしていたが、なんとか治療で家族の絆を保つことができた――それが小さな満足。

［質問――センターの活動についてどう思うか？］

――とりわけセミナーがよい。家族を指導するものだが大変よいものだと思う。また心理士のワークショップがいい。個人から個人へというのがセンターのモットーだ。国立のセンターにはない。CECOSAM にはたくさんの工夫がある。

［質問――あなたの立場についてどう思うか？］

――みんなと同じだ。目的を同じくして、人々に対処している。今 CECOSAM には問題がある。わたしは支持している。ここでの仕事は好きだ。仕事に差異はあっても、個人的差異はない。

［質問――日本・ペルー関係についてどう思うか？］

――国と国の関係は、個人と個人の関係とはちがう。フジモリは国に打撃を与えたペルー人だ。しかし、日本は外国で生まれた者に国籍を与えた。今の日本は問題だと思う。

［質問――トレド新大統領についてどう思うか？］

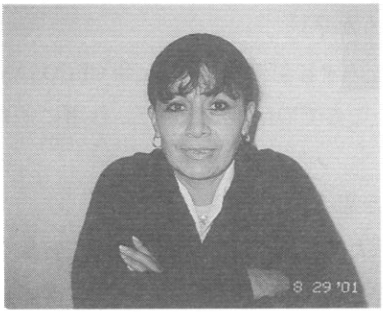
――個人的には支援した。しかし、彼の考え全体に対してではない。貧困家庭の出身ということで期待している。しかし農村の人は知的ではない。機会の欠如があるからだろう。そこで子どもに、なぜ勉強しているのか、と聞くと「大統領になるため」という。悪い影響だ。ここでの治療の方がよほど国のためになる。

11　その他のスタッフ

（1）　ファウスティナ
(Faustina Mas 普及員)

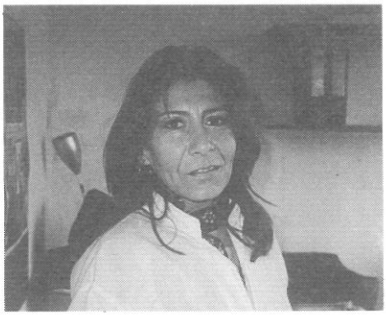
（2）　テレサ
(Teresa de Munive 受付)

（3）　マリア・エステル
(Maria Esther Olivera 社会助成係)

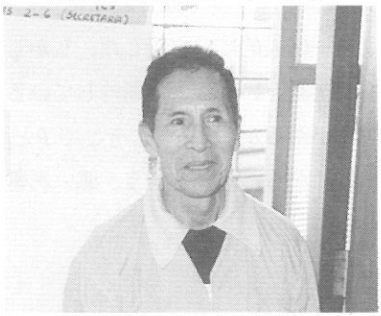


（4）　ロサリオ
(Rosario Ramirez 秘書)

（5）　ロサ
(Rosa Casavilca 小児科医)



（6）　ネストル
(Nestor Quispe ガードマン)



Ⅲ　むすびにかえて

ビジャ・エルサルバドル第３弾をお届けする。今回紹介するのは、ユニークな街ビジャ・エルサルバドルが生み出した、ユニークな精神衛生センターである。筆者が最初に CECOSAM を訪れたのは1999年のことである。当初からそのユニークさ、スタッフの前向きの姿勢、誠実さに心打たれた。いつか紹介しようとその時心に決めた。今回やっとその誓いを果たすことができたが、日本の読者に筆者の思いがいくらかなりとも御理解頂ければ幸いである。

それにしても、このようなセンターを生み出した背景となっているペルーの貧困の根深さに驚かざるをえない。貧困が家庭内暴力を生みだしそれが子どもの精神衛生に影響するという悪循環は、日本の日常にどっぷりつかっている人には想像もつかないであろう。しかし、それがこの世界の現実なのである。

子どもは笑っている時が一番かわいい。しかし、笑えない子どもがいる。泣かずにはいられない子どもを一人でも少なくしようと、CECOSAM とカルメン所長は頑張っている。低開発という巨大な闇に向かって放つには、あまりにもかぼそい一筋の光ではある。その光を支えているカルメン所長の勇気には頭が下がる。他の誰がこんな徒労に挑戦するだろうか――

「グローバリゼーション」が流行語となっているが、グローバル化されないで見捨てられる部分の方が大きい、ということを決して忘れてはならないであろう。そういう意味において、今回の調査では筆者自身も目からウロコの落ちる思いであった。

周辺国ペルーの周辺内周辺部（subperiphery）であるビジャ・エルサルバドルの貧困の最深部に、CECOSAM は対峙しようとしているのである。

こんなすばらしいセンターを閉鎖させてはならない！そのために、なんらかの具体的行動をとりたいと考えているところである。

末筆ながら、筆者にオフィスを与え、全面的に調査に協力してくれたカルメン・ピメンテル所長に厚く御礼申し上げたい。またインタビューに快く応じてくれたスタッフの皆さんにも御礼申し上げる。こんなささやかなものでも、

CECOSAM の活動の一端を日本の読者に伝えることができたなら望外の喜びである。

2001年８月30日

ビジャ・エルサルバドル　ドゥラン宅にて

文献目録（BIBLIOGRAFIA）

1　Fuentes Primarias（Entrevistas）

（1）　Carmen Pimentel　21/08/01
（2）　Jorge Soto　14/08/01
（3）　Myriam Vergaray　08/08/01
（4）　Vicente Ramon　06/08/01
（5）　Fernando Salinas　10/08/01
（6）　Patricia Santiani　15/08/01
（7）　Fany Mercedes　10/08/01
（8）　Milian Quintanilla　08/08/01
（9）　Randdy Arturo　08/08/01
（10）　Eumelia Ramirez　14/08/01

2　Fuentes Secundarias（欧語文献目録）

McElroy, Stephen Arlo;1999 "In Stu Accretion and Urban Transformation of the Periphery:Social and Physical Changes in Villa El Salvador, 1971-1998,"Doctor Dissertation at Univ. of California, Santa Barbara, and San Diego State Univ., June.

Pimentel, Carmen(ed.);1995 *Violencia,Familia,Niñez en los Sectores Urbanos Pobres,* CECOSAM.

Ibid.; 2000 *Salud Mental & Comunidad,* Miraflores : CECOSAM.

3　邦語文献目録

原田　金一郎

2000　「自主管理都市共同体ビジャ・エルサルバドル―代替的社会主義論のためのフィールド・ノート（予備的省察）」
大阪経済法科大学『経済学論集』23巻３号

2001　「ビジャ・エルサルバドルにおける社会主義と工業団地―自主管理社会主義から住民コミューンへ―」
大阪経済法科大学『経済学論集』24巻３号